

ヤンデレ×ヤンデレ×  
百合=!

テツポウユリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヤンデレ少女がヤンデレ少女と付き合うと……。

※ヤンデレです。苦手な方はご注意ください。

※ガールズラブです。苦手な方はご注意ください。

# 目次

ヤンデレ×ヤンデレ×百合!!? | 1



# ヤンデレ×ヤンデレ×百合Ⅱ？

葵とは小学生の時に知り合った。

私は昔から楽観的で、物怖じしないタイプだった。だから、引越してきたばかりで初めて出会う女の子に声をかけたのだった。

葵は教室の隅で誰にも気づかれないうように本を読んでいるようなおとなしい子だったけれど、話しかけると色々なことを考えているのが伝わってきて、私はすぐその虜になっちゃった。

葵は物知りで、たくさん知識を私に教えてくれた。勉強だけではなくて好奇心の満たされる科学的な話や、果てにはファッション、コスメのことまで。

うんと幼い頃から手入れを欠かしていない葵の髪はまっすぐで、それを掻き上げるとふわりとした花の香りが漂ってくる。

子供らしくはしゃぐタイプでない葵は幼少期は周囲から距離を置かれることが多かったが、今は違う。なにせ知的でクールな美少女女子高生だ。放っておいてもお近づきになりたい男子とお零れに与りたい女子がわんさか寄ってくる。

……まあ、今でも高嶺の花扱いされて一部生徒には敬遠されているようだが。

そんな葵だが、私との関係に転機が訪れたのは中学生の時だった。

それまで私は誰かに恋をすることもなく、友人は多いもののどこか空虚な日々を送っていた。

そして、葵は私にとってかけがえのない幼馴染兼親友という立ち位置でしかなかった。

次第に私は好きでもないのに男子に告白しては付き合い、交際を重ねていくことになる。というのも、当時の私はクラスの中でもなぜかモテる印象を抱かれており、その期待に応えなければと考えるくらいには自分の恋愛への無関心さに気後れしていたからだ。

どこか焦っていた。

告白して、付き合って、どこか性格が合わなくて振られる。好きでもない相手ではあったが、振られるのは自分を全否定されているようで心に刺さることが多かった。

かと言って、義務感からできた恋人が長く続くはずもなく、一年で十人ほどと付き合い、ピッチの称号を手に入れた。

少しずつ孤立していき、焦りと不安が心を押しつぶしていった。

そんな中でも葵はずっと私のそばにいた。

そして――。

「好きです！　美月が好きです」

呆気にとられる私の顔を見ずにと下を向いたままの葵が言った。

「ごめんなさい、こんなこと言つて本当にごめんなさい。でも！　私は美月のことが恋愛的な意味で好きなの……」

振られる恐怖。友情の壊れる恐怖。関係をすべて打ち切られるかもしれない恐怖に怯えて、蒼白の顔で告白してきた彼女を見たとき、私は本当の愛を見つけたのだ。

一番大切な人は気づかないくらい近くにいるのだということ。

私がどうして愛を見つけられなかったのかがよくわかったのだ。ずっとずっと大切な親友ではあつたけれど、私は同性を恋愛対象として考えてもいいということをする時やつと知つたのだ。

私に気が付かなかつた六年越しの両片想いはこうして決着がついた。

「ねえ美月。今日、なんで一緒に帰れなかつたの？」

切れ長の目をいつもよりも心配げに揺らして問われた。

「ごめんってば。文化祭実行委員で捕まっちゃって……」

文化祭実行委員。文字通り文化祭の運営、準備を行う委員会だ。短期的なものだからとクラスの雰囲気に乗せられてノリで選んでしまったものの、予想以上の拘束時間となつて葵との時間が削られていつていた。

「ふーん、委員会か。じゃあ西城さんかな、一緒にいたのは。それとも南くん？ あ、それともあれかな。壱岐さんかな？」

「ずずい」と整つた顔が近づいた。

「さ、西城さんだよ。ほら、あの子委員長だし。一杯仕事抱えてるみたいだし」

「そっかー。西城さんかあ。二人つきり？ おかしいなあ、おかしいよね、変じゃないかな。私たちが付き合ってるんだよね？ なのに別の女の子と二人つきり？ へえ。美月、私のことどう思っているの？」

葵の声から色が無くなつていく。

「ワタシ以外のヒトとフタリつきり？ どうしてどうしてどうして、まるでまるでわたしが大切じゃないみたい——」

底冷えするような冷気が足元を這い、つま先から凍えていく。

でも——。



「もう！ 葵は心配性だなー。私が愛しているのは葵だけに決まっているじゃん」

そう言つてほっそりした白い手を握ると、ポフンと目の前で何かが噴火したような音がした気がした。

「や、やだ、美月つたら。そんなことで誤魔化されたりなんか……」

そう言つて身を縮こまらせる葵の手をぐつと引いて耳元に口を寄せる。

「わかってくれるまで何回でも言うよ。葵、大好き。愛してる。世界で一番大切だよ」

「ふへえ」

あ、崩れ落ちた。

学校では絶対に見せることのない緩み切つた表情でビクンと跳ねる身体。

この部屋では見慣れた風景ではあるけれど……。

私はスマホでその姿を何枚か収めて、ほくほくした気分でパソコンのバックアップファイルに転送した。葵ファイル内の写真もこれで972枚か……。後28枚で大台に乗る。

えっ？ 写真を取る理由？

だつてこんなかわいい姿を残さないなんて世界の損失でしょ。

それはそうとして――

「そう言えば葵さあ、私と離れている間、なにしてたの？」

「えっ」

まだ崩れたままの葵を抱き起こす。まだ足腰に力が入らないようで上手く立ち上がれないのか手を私の腰に回してきた。

「私はさあ、早く葵に会いたくて、話してる時も葵のことだけを考えて、葵のことで頭の中ずつと埋め尽くしてたのに……。何？ 葵は別のことを考えてたの？」

「……へ？」

ああ、違う。怒りたい訳じゃないのに。でもイライラする。

イライラ、イライラ。この気持ちは何だろう。

「どうして私のことを考えているときに西城さんが出てくるの？ それって、私のことで頭の中が一杯になってないってことじゃない？」

「ご、ごめ……」

「何で別の人のこと考えてるんだろう。どうすればいいんだろう。悪いことするのが手とか脚だったら切り離しちゃえばいいけど……。でも頭を切り離したら葵が死んじゃうよね。」

「み、美月……」

か細く心地いい声が私の耳に届き、頭の中をすつきりとさせる。

「そうだ！ 今までのことなんてどうでもいい。これから、私のことしか考えられない

ようにしてあげればいいんだ。」

「ごめんなさい……私、私」

「いいんだよ。だけど私のことだけで一杯にしてあげるから、もう葵も私のこと以外考えちゃだめだよ」

こくこくと震えるつむじを見下ろして私はにっこり笑う。

「ちゃんと反省してて偉いね！ もし嘘ついたら、舌、引っこ抜いちやうから」

ああ神様、私、こんなに幸せでいいんでしょうか。

大好きな人と両想いで、しかも似た性質をもって生まれたなんて！